



対談

逆境からのチャレンジ 夢を持ち そして一歩踏み出す

夢を持つこと、一歩踏み出すことの大切さを語る東京大学法学部の蒲島郁夫教授。教授の経歴は異色である。農業研修生としてアメリカで研修するうちに学ぶことの楽しさに目覚めた氏は、ネブラスカ大学農学部で学び、続いてハーバード大学大学院で政治学を学ぶ。紆余曲折を経て夢を実現した氏に、ご自身の半生や教育への思いを伺った。

聞き手
株式会社インテックホールディングス
取締役会長兼社長

中尾 哲雄



東京大学法学部 教授
蒲島 郁夫氏



東京大学法学部 教授 蒲島郁夫氏(かばしまいくお)
1947年 熊本県生まれ。県立鹿本高校卒業後、農協に勤務。68年農業研修生として渡米、71年ネブラスカ大学農学部に入學、74年卒業、75年同大学院修士課程を修了し、ハーバード大学大学院博士課程入學、79年同大学政治経済学博士号取得、80年筑波大学社会学系講師、85年ワシントン大学客員准教授、85年プリンストン大学国際関係研究所客員研究員、筑波大学社会学系助教授、教授を経て、97年東京大学法学部教授、現在に至る。

農協職員から 東大法学部教授へ

中尾 先生は東京大学政治学の教授でいらっしゃるようですが、それにしてもしュルクなご経歴ですね。熊本の高校を卒業後、農協に勤務、農業研修生として渡米、ネブラスカ大学農学部で繁殖生理学を学ばれた後、ハーバードで政治学を勉強された。

蒲島 東大法学部の教授になられたとき、読売新聞の社会面に5段抜きの記事ができました。見出しは「農協職員から東大法学部教授へ」、精子から政治へ。よほどシュルクだったので

しゅつね。でもよく東大法学部が私を呼んだと思いますよ。

中尾 長くおつきあいをいただき、いろいろ教えていただきましたが、先生と私の共通点は農家に育ったことだけと気づきました。

蒲島 中尾さんとの共通点は農家に育ったこと、戦後の飢えの苦しみを知っていることでしょうか。家族は満州から熊本に引き上げたのですが、2反ちよつこの小さな農家で9人子どもがいたものですから本当に貧乏でした。中尾さんのような富農ではなく小作でしたから。

中尾 私も貧しかったですね。戦後、

蒲島 そのとき勉強しようと思ったのは、子ども頃の貧乏生活やアメリカでの暗い農場生活があったからこそでした。

中尾 そのモチベーションは理解できません。私も英語をかなり勉強しましたが、それは農家の長男から抜けるためには勉強しかなかったので思っただけです。この辺が先生と違って不純なモチベーションでした。

蒲島 昔の農家は大変でしたからね。川口文夫中部電力会長も農業から抜け出すために一生懸命に勉強したとおっしゃっていました。

中尾 その苦しさはバネになったこととは間違いですね。でも、やはり夢が人を輝かせ、希望が人を大きく

するのだと信じています。

柔軟なアメリカの大学教育

中尾 研修終了後、一旦帰国されて牛乳配達で旅費を貯めて片道切符で再度アメリカに渡られた。

蒲島 ネブラスカ大学に着いたときには所持金50ドルでした。通訳をしながらSAT(アメリカの大学入試共通試験)の勉強をしたのですが不合格。ところが、通訳を務めていた肉牛コトスの担当講師が入試担当官に直談判してくれて仮入学できました。

中尾 そこでオールAをとって特待生になり、奨学金も貰われる。

蒲島 25歳で大学に入ったのですが、



父の郷里に帰ったのですが、家族が14人と多く食べ物がないで大変でした。先生は著書「運命」の中で、夢を持って努力したとおっしゃっていますが、やはり先天的な才能を持っていないではないでしょうか。正直に言うてくれないませんか。

蒲島 いえ、小学校の成績表では5を1個しかもらっていないのですよ。それも読書感想文が良かったということで、6年生の3学期の国語が5だったのです。

中尾 信じられませんが、私は5ばかりでしたが、その後まったく駄目人生。

蒲島 知能テストもいっぽうではありませんでした。天才は別として、人間の才能はあまり変わらないのではないのでしょうか。それよりも、きうかけやモチベーション、そして夢が重要だと思っています。

子どもの頃からGINOの夢

中尾 どんな夢をお持ちだったのですか？

蒲島 夢は三つありました。一つ目は本を読むのが好きだったので小説家、次に政治家、三つ目は阿蘇山の麓に牧場を開く夢です。この三つ目の夢を実現するためにアメリカへの農業

研修生に応募したのです。

中尾 農業も政治も最初の夢だったわけですね。普通は夢という思い巡らしているだけでなかなか実現しません。

蒲島 一歩踏み出すことが重要なのです。牧場を開くためには知識がいる。だからアメリカの牧場で学びたい。でも、普通は思うだけでしよう。一歩踏み出して試験を受けて研修生になる人は少ない。あの時、踏み出したことがよかったです。

中尾 アメリカでの研修生活はいかがでしたか？アイダホの広大な農場で夜明け前から日が落ちるまで、ブリザードと呼ばれる雪風の冬も毎日作業をされたとか。

蒲島 アメリカの牧場では研修生としても安い労働力ですから、本当に大変でした。あまり疲れると不平不満を言う気力もなくなるのですよ。帰国の半年前にネブラスカ大学で3カ月間の学科研修がありました。このとき初めて勉強というものをしたのですが、肉休労働に比べたら学問はなんと楽なのかと思いました。

中尾 勉強は大変といわれますが、ある意味、机に座って好きな勉強をするのなんて楽なのかもしれませんね。

すく成果が上がりました。高校でさほど勉強しなくても大学で基礎から教える、というアメリカの教育制度が私にはよかったです。

中尾 その後、政治学に進まれるわけですが、農学部で立派に成績をあげられたのに、今度は政治というその踏み出しは理解できないのですよ。

蒲島 一学期間をみると考えたときに、一番目の夢だった「政治家」転じて「政治を勉強したい」という思いが湧いてきたのです。政治は好きになると最後まで好きなもの。農学部での実績で自信が出たのでしゅつ。それがハーバードの入試担当教授の心に響いたのかな。

中尾 簡単そうにおっしゃるけれど、何度お聞きしても信じられませんね。やはり「変人」かな。

蒲島 全く政治を勉強していないのに、よく奨学金をつけて大学院に入れてくれたと、あの弾力性には今でも感銘を受けます。農学部の指導教授は研究室に残そうと思っていましたから、いい気持ちにはなかつたでしょうが立派な推薦状を書いてくれました。

中尾 政治学の分野で農業の経験は少しは役に立ちましたか？
蒲島 当時、日本の政治学者はすべて自民党の政策は間違っていると

していました。でも私はアメリカで自民党政治を客観的に評価することができた。自民党政治のいいところは、経済発展を進めながら農村部に所得の分配をしたことです。だから、民主化を進めながら、発展と平等を両方とも達成し、安定した国をつくることのできたのです。なかなかできないことですよ。

中尾 この自民党の伝統的な路線、発展と平等の路線を効率化の方向に向けた。それが参院選の結果、そして今の政治の状況を招いたともいえるかもしれませんね。

蒲島 もう一つは、当時の日本の政治学者は農家を非リートととらえ、彼等の政治参加を歓迎しませんでした。でも、経験からそうではないと実感していましたので、農家の政治参加がどう政治発展に響くかを研究しました。これは有名なサミュエル・ハンチントンの理論に対する批判でもあったわけです。ハンチントンは民主化と発展、平等は両立しないという意見ですが、私はうまくいくのではないかと論じたのです。それはやはり農家の経験があったからですね。

中尾 ハンチントンはリアリズムを基調とした保守的な思想で知られる国際政治学の世界的権威。文明の

